諫早市こどもの城
実績報告書 Vol.7

～こどもの城は、こう見られている～

平成 27 年度

こどもの城は、こう見られている

諫早市こどもの城は、既存の施策を複合した新しい児童施設として開館し、７年が過ぎようとしています。これまでにない自治体独自の施策であったためか、開館前は施設の必要性を含め、運営を心配する様々な意見もありました。

しかしながら、子育て支援の充実や少子化対策がますます叫ばれるなど、時代の推移とともに、今では、諫早市の特徴的な施策の一つとして成長を続けています。市外・県外から視察に来られた方からは、「諫早市は先見の明があったのですね」という感想をいただくことも、しばしばです。

そんな成長途上の施設ですが、当然、弱点もあります。その代表的なものが、「こどもの城って、どんなところですか？」という質問に、一言では答えられないことです。既存の施策で言えば、少年自然の家など青少年教育施設・児童館・子育て支援センターの機能を複合したような施設ですが、この説明では全てを表しきれません。利用形態は様々なので、各人によって、こどもの城のイメージも異なるでしょう。

そこで、こどもの城がどのように見られているのか、こどもの城に深く関わっていただいた方々のお話を紹介しながら、様々な視点から、こどもの城を分析してみます。こどもの城は市民とともに創り続けていく施設です。分析を元に、今後も成長していきたいと考えています。

≪参考≫　諫早市こどもの城のデータ

（１）低コスト、多くの利用者

年間１０万人超の利用者、県立・国立の類似施設と比較して小額の予算

（２）宣伝費なしで、多様な団体からの依頼

広報費用０円で年間２００団体の利用（うち１６０団体のプログラムに関与）

・・・親のプログラム、教師の研修、児童厚生員の研修、病院や福祉施設職員の研修、市職員の研修、大学の授業等

（３）高いリピーター率

スタッフは素で対応しているのに、利用者の９割超がリピーター

（４）スタッフとの“顔が見える”関係

こどもの城で働く資格は、「こどもの城が好きなこと」であり、ボランティアからスタッフを採用し、併せて、「人が一番の遊具」という形で運営

（５）常に充実と改良に努める体質

第１章　「コミュニケーション・センター」

くりこま高原自然学校　　佐々木豊志さん

宮城県栗原市で、自然体験を通して青年の自立支援などを実践している「くりこま高原自然学校」の佐々木さんは、諫早市こどもの城の「子育て支援交流事業」で親向けプログラムの開発を努めていただきました。佐々木さんは、「森のようちえん全国交流フォーラム」の提唱者でもあり、「森のようちえん」を実践している諫早市こどもの城としては、先駆者としてお手本にしたい方の一人であります。そんな佐々木さんが、諫早市こどもの城に来られ、日曜日に行っている歌の催し「こどもの城バンド」に参加されて、子どもからお年寄りまで、その場にいる人が理屈抜きでいっしょになって歌い、踊っている姿をご覧になって、思わず漏らした感想です。

「子どもからお年寄りまでいっしょになって何かをやるこの姿こそ、自然体験を実践している人たちに見てほしい。」
「ここほど、スタッフが明るく、チームワークがいい施設は他にないのでは！」

もう少し、佐々木さんと話した内容を紹介しながら、諫早市こどもの城を自己分析してみようと思います。

佐々木さんが注目されていたことの一つに、地域住民の存在がありました。佐々木さんも、宮城県の山中に自然学校を設立される時に、地元の方々の理解は不可欠だったそうです。その頃は９０年代で、オウム真理教による事件などの社会背景により、地域の方が抱える不安を払拭する必要があったそうです。公的な施設ならいざ知らず、民間（ＮＰＯ）の施設ですので、信頼していただくまでにご苦労もあったようです。

一方、諫早市こどもの城は行政の施策ですので、ある程度の信頼性は得て進めることができました（その分、議会での議決、予算案の作成、地元住民等への説明など、別の形での手続きは必要でしたが）。

民間で活躍されている佐々木さんから見て、諫早市こどもの城が行政施策であることには、ある種の驚きと共感があったようです。まずは多くの地域住民が利用されていること、その利用者がそれぞれの目的に沿って施設を活用していること、その利用者の顔つきが笑顔であることが印象に残られた（これらの要因により、諫早市こどもの城は、平成２６年度に公共建築賞を受賞しました）ようです。

佐々木さんは、「生きる力」の概念を大切にしながら、冒険教育の手法を用いてご自身の活動を展開されています。

「生きる力」を培うには、多くの試行錯誤や切磋琢磨が必要だとも言われます。一方で、行政の施策は税金を使って運営するので、基本的に失敗ということは許されません。ある意味で、行政は、冒険という言葉に縁遠い性質を持っているとも言えるでしょう。行政が「生きる力」を推し進めるには、自らは冒険を避けつつ、住民には冒険的要素を提供していくという矛盾を感じることもあります。

しかしながら、行政とは住民のためにあるものです。諫早市という自治体が行政施策として、こどもの城という施設運営に一定の成果を上げている背景に、地域住民の存在があると佐々木さんは考えられたのです。その地域住民に対して、施設が提供している最たるものが、諫早市こどもの城の場合には、コミュニケーションだと感じられたようです。

スタッフの覇気

諫早市こどもの城の場合には、コミュニケーションを「提供している」というよりも、「自然発生している」と表現した方が適切かもしれません。その一翼を担っているのがスタッフの存在です。佐々木さんは、スタッフにも注目をされていました。スタッフの多くは嘱託員ですが、諫早市こどもの城のボランティア経験者でもありますので、施設職員としてだけでなく、利用者としての視点から他の利用者を見ることができます。よく、「こどもの城の一番の遊具は人だ」などと言われますが、スタッフは利用者を「お客さん」ととらえていません。遊び相手・学ぶ仲間として、利用者に寄り添っています。したがって、“普段着”の会話が自然発生しているのです。スタッフも大人ですので、一応の敬語は使えますし、少しは礼儀作法も知っています。しかしながら、遊び相手・学ぶ仲間として関わるために、“普段着”の会話を優先しているのです。

コミュニケーションは、現代社会の一つのキーワードかもしれません。確かに、難しい面もあります。関わることで相手が喜ぶだろうか、かえって迷惑になるのではないだろうか、などと考えてしまうと、一つの会話、一歩の行動が出ない場合もあります。諫早市こどもの城では、「相手が喜ばないかもしれないと思って何もしないくらいなら、喜んでもらいたいと思って行動してみた方がいい。それで、喜ばなかったら、まず謝る。」そう考えて行動しているスタッフがほとんどです。覇気（積極的に立ち向かおうとする意気【出典】: 広辞苑）を抱いたスタッフによって、コミュニケーションが発生し、そこに地域社会が本来持っている関わる機能が盛んになっていくという循環が生まれています。

この手法が正しいかどうかはわかりません。地方自治体の施策として、地域に目を向け、地域住民のために良かれと思うことを実践していく、いわば当たり前のことを普通に実践していることを、佐々木さんに感じていただいただけです。そして、利用者の笑顔を佐々木さんが見逃さなかっただけです。

地域は英語に訳すと「コミュニティ」です。コミュニケーションと同じ音が含まれています。コミュニケーションの語源であるラテン語には、一つにするとか許すという意味もあるようです。“普段着”の会話やふれあいが失礼な場合は、どうぞお許しください。お許しいただけない場合は、より効果的に利用者の笑顔が見られる手法を、私たちスタッフと一つになって伝授してくださいますよう、よろしくお願いします。

第２章　「ラーニング・センター」

玉川大学心の教育実践センター　　難波克己さん

玉川大学心の教育実践センターの難波さんは、諫早市こどもの城の「子育て支援交流事業」で児童生徒向けプログラムの開発を努めていただきました。難波さんは、アドベンチャー教育・アドベンチャーカウンセリングの手法を日本に伝えた方であり、ベンチャー型行政とでも言うべき手法を実践している諫早市こどもの城でも、開館前からボランティア研修などで講師を努めていただきました。
そんな難波さんが、諫早市こどもの城のボランティアに問いかけたことです。

「私たち、大人は、どれくらい遊べますか？」
「私たち、大人は、学び続けますか？」
「皆さん自身で、学びを継続するといいのではないでしょうか？」

もう少し、難波さんと話した内容を紹介しながら、諫早市こどもの城を自己分析してみようと思います。

学ぶこと

難波さんは、米国の大学を卒業されました。留学中に抱いた疑問を率直に教官に語ってみたら、卒業の認定をいただいたそうです。難波さんの抱いた疑問とは、学ぶことについてでした。難波さんと教官とのやりとりは、次のようなものだったそうです。

「私は、米国の田舎にある大学に留学しましたが、ここにある図書館の文献だけでも、一生かかっても読むことができません。」
「ようこそ、博士の世界へ！　そうですか、そこにたどり着きましたか。」

このやりとりの意味は、ギリシャの哲学者ソクラテスに関する逸話と似ています。自分が無知である事を認識することが知であるという話です。難波さんは、ボランティアの方々に学び続けることを提案されたのです。ともすれば、ボランティアを対象としたような研修は、施設側が企画することも多いと思われますが、難波さんは、自らその機会を創り出すことに意義を感じられたのです。

このことを受けて、こどもの城のボランティア研修に参加された方々が、自分たちでフォローアップ勉強会を企画されました。この勉強会には、親、教師、県の親プログラム指導者や行政担当者など、様々な人々が立場を超えて参加しています。回数も１年間で９回を数え（平成２７年末現在）ました。今後、こどもの城を拠点として、このような学びの機会が充実していくように、支援していきたいと思います。

Adventure の視点

難波さんが提唱する学び方の一つに、楽しさがあります。楽しさは、同時に学ぶ動機につながります。同時に、楽しさという感情は最も学ぶことが効果的な条件となると言われています。難波さんは、国内各地に Adventure Based Counseling の概念や手法を伝えられました。Adventure と聞くと、大掛かりなことを想像してしまいそうですが、難波さんは、Adventure はもっと身近にあると言われます。そもそも、Adventure は Venture（チャレンジする）と Advent（迎える）という二語から成り立っていると言われます。学ぶこと自体が Adventure とも考えられそうです。

また、難波さんは、カール・ロジャースを引用し、次のような学習の原則を語られました。

☆ 人間は、生まれながらにして学ぶ力を持っていること
☆ 自分の目的とテーマが関係あると学習者が感じると、学びは促進されること
☆ 学習者自身が責任を持って学びの過程に参加するとき、学びは促進されること
☆ 現代では、学び方を学ぶことが役立つこと

開館して７年が経とうとしていますが、こどもの城でも同様の考え方を大切にしてきたところです。特に、学び手に主体を置いた支援をし、時には学ぶ目的がはっきりしない団体・機関からの指導依頼をお断りすることも、ある種の親切であろうと考えてきました。そうした実践を続けてみたら、年々こどもの城に多種多様の依頼が舞い込むようになりました。大学の講義や演習、親のコミュニケーション・ワークショップ、中高生の部活などにおけるチーム・ビルディング研修、病院や福祉施設における対応の研修、民間企業や団体の企画や経営の研修、教師・保育士・幼稚園教諭・学童保育指導者の各種研修・・・と増加しています。いずれも、こどもの城からは、積極的にお知らせしていないのに、口コミで伝わるようです。

難波さんは、何度かこどもの城に訪れ、「多くの市民や利用者にとって、こどもの城がラーニング・センターとして、すでに認知されているのでは」と感じられたそうです。そして、こどもの城が、その機能を十分に果たせる施設だと感じられたようです。今後も、こどもの城がこのような依頼にお応えできるのか、まさに Adventure の考えで臨んでみます。

第３章　「ネイチャー・センター」

当別エコロジカルコミュニティー　山本幹彦さん

ＮＰＯの代表をされている山本さんは、諫早市こどもの城の「子育て支援交流事業」で親子向け環境教育プログラムの開発を努めていただきました。山本さんは、ソーシャルワーカーとして活躍されたあと、北海道の当別町に移られ、スウェーデンやアメリカの野外教育・環境教育の指導者と連携・協働され、様々な活動を実践されています。「森のようちえん」という北欧発祥とされる幼児期の自然体験活動を実践している諫早市こどもの城でも、開館前からボランティア研修でも講師を努めていただきました。そんな山本さんが、以下のようなことを問いかけられました。

「『ネイチャー・センター』って、どんなところを想像されますか？」

もう少し、山本さんと話した内容を紹介しながら、諫早市こどもの城を自己分析してみようと思います。

地域の人のための施設・環境教育

「ネイチャー・センター」と聞いてまずイメージするのは、多くの人にとって「自然」ではないでしょうか。まさに、その名称が英語で入っていますので。「ネイチャー・センター」という名称に限らず、その土地の「自然」のことを知ることができる施設として、「ビジター・センター」という名称の施設も、国・自治体・民間などで運営され、広く知られています。こちらは、名称に「ビジター」が入っています。「ビジター」は直訳すれば、「訪れる人」と言い表すことができるでしょうか。旅行や観光で訪れた方々にとっても、自然のことを含め、その土地のことを知り、学ぶことができます。しかし、旅行者であれば、「トラベラー」であり、ビジターとは異なります。「ビジター」は、広く「訪れる人」を指すようにとらえられます。

山本さんによれば、アメリカなどにも「ネイチャー・センター」という名称の施設があるそうです。

「『ネイチャー・センター』って、どんなところを想像されますか？」という問いに、こどもの城のスタッフが、「旅行者や自然が好きな人が立ち寄り、情報を得たり、展示や簡易な体験ができたりするところ」と答えました。

「そういうイメージですよね」と山本さんが返します。そして、「実は、アメリカのネイチャー・センターは、旅行者というよりも、“地元の方”が集まる、“地元の方のための施設”なのですよ」と続けられました。

山本さんが紹介されたのは、テキサス州にある「ネイチャー・センター」でしたが、そこでは、情報提供や展示のほかに、次のような機能があるそうです。

・学校などを対象とした教育プログラムの提供
・ガーデニングや貸し農園

・家族を対象としたメモリアル・トゥリー（記念樹）の植樹
・コンサート開催やアートの展示会

このような機能を提供するための収入源として大きなものは、寄付であるとのことです。寄付される方や団体も、「ネイチャー・センター」の意義を感じておられるからだと想像しますが、一番の意義は、「その土地の人が、自然を学びながら幸せに生活できるように」ではないでしょうか。また、貸し農園・ガーデニングやメモリアル・トゥリーの背景には、イベントなど一過性のものでなく、継続した取組の提供という考え方があるそうです。

「ネイチャー・センター」と聞くと、建物のことを指すようなイメージを抱きそうですが、「エリア（その土地の人が住んでいる地域）のことを指すのですよ」と山本さんは笑顔で語っていただきました。そして、この「ネイチャー・センター」の看板に書かれていた言葉を紹介されました。

Our goal is to share the joy of nature with children.
（私たちのゴールは、子どもたちとともに、自然の楽しさをわかちあうことです。）

“自然おたく”を作りたい訳じゃない

山本さんは、スウェーデンの「ネイチャー・スクール」や野外幼稚園のことも紹介していただきました。スウェーデンと言えば、デンマークと同じ北欧に位置する国です。デンマークは「森のようちえん」発祥の地として紹介されている国ですので、どことなくスウェーデンも国をあげて「自然体験活動」が盛んに展開されているというイメージを抱きがちです。しかしながら、山本さんは言います。

「日本と変わりませんよ。まだ、『森のようちえん』などを実施しているところは珍しいのです。」

さて、「ネイチャー・スクール」のことですが、スウェーデン国内には約８０箇所があるそうです。そのうち、山本さんが実際に訪れたのは、ニュネスハム市にある施設です。市民が認定し、市が民間に委託した「ネイチャー・スクール」は、民家を少し改修した規模のものです。平日の朝からクラス単位で授業として、地域の学校が訪れて、自然体験活動を機軸にしたグループワークや、算数として図形や倍数に関する授業が展開されます。授業ですので、昼食時には市から給食が届きます。授業の最後には、必ず「ふりかえり」の時間があり、まさに体験学習法と言われる学習形態で授業が展開されます。そこに、サポーターとしてＰＴＡが入り、指導者とともに子どもたちの学習を促進していく役割を担います。

つまり、地域をあげて、子どもたちの教育が展開されているのです。内容も、自然という場のことを学ぶ社会科や理科の授業ではなく、自然という場を使って人を育てていく、いわば場の力学とでも言うべき、学び方の学習が展開されているのです。スウェーデンの「ネイチャー・スクール」もまた、地域に根ざした教育を展開する場所であり、決して“自然おたく”を作るための施設ではないのです。

こどもの城でも、このような「ネイチャー・スクール」に似た学習が、一例だけ展開されています。山本さんは、こどもの城が、先に述べた地域の人のための「ネイチャー・センター」に近いものとして認識され始めており、今後もその役割を担うことができるのではと言われています。

第４章　「大人の城」

利用者の方々

開館して７年。諫早市こどもの城は、もうすぐ８０万人目の利用者を迎えそうです。年間に１０万人以上の利用者を迎えたことになります。これに、出前プログラムや市外・県外に講師を派遣した人数を加えると、凄い数になります。確かに、この数字は類似施設と比較しても、かなり多い利用者数（諫早市こどもの城の利用者数は「来館者のみ」の数を公表）です。

しかしながら、諫早市こどもの城は、子どもたちが「生きる力」を培い、そのために大人も共に学ぶという大きな目的のもとに設立されたものです。利用者の数が多いからといって、目的が達せられたかどうかは別の問題です。何を求めて来館されたのか、何を求めて講師を依頼されたのか、そこを分析し、把握し、何を提供することが大切なのか判断し、実行し、評価し、継続して実行されなければなりません。ある方は子どもに思いっきり遊ぶ体験を積んでほしいと願い、ある方はＰＴＡなど地域活動の質を高めたいと願い、ある方は自身が社会の役に立てないか活動の場を求め、またある方は子育ての悩みの相談を願い・・・と多種多様な思いを抱いて来館されます。

そんな利用者やボランティアなど、こどもの城に集っていただいた皆さんが、時々、以下のようなことを言われます。

「ここは、『大人の城』なんですね。」

もう少し、利用された方々との会話を紹介しながら、諫早市こどもの城を自己分析してみようと思います。

☆　心理的な支援～親として

子育て支援は、まだまだ充実されていく余地のある分野だと考えています。同時に、一昔前と比較してみると、充実している部分もたくさんあると思います。例えば、子ども手当てなど経済的な支援、医療や各種運動教室など健康・肉体面での支援、そして、親どうしが語り合ったり、打ち明け合ったりできる場を提供する心理的な支援です。これらの支援を得ることができる機会や場は、以前よりも格段に進んでいると感じます。

では、以前は、そういった支援や情報はどうやって得ることができたのでしょう。諫早市こどもの城では、それを「地域」、とりわけ隣人（よく会う人・近くにいる人）と考えています。「遠くの親戚より、近くの他人（地方によって多少の表現の違いがあるかもしれません）」などと先人は言われました。人は助け合って生きていけることが実現できたのでしょう。とりわけ、心理的な支援は、身近な地域の方、隣人と語り合うことによって得られたのでしょう。

現代でも、地域の方や隣人の力を借りながら、子育てをしておられる方がたくさんいらっしゃいます。一方で、自分だけ、我が家だけで子育てをしておられる方も時として見受けられます。そして、情報化

が、他人の力を借りるという考えから遠ざかることに拍車をかけている例もあるようです。

こどもの城では、開館以来、会話や身体接触を伴う直接的なコミュニケーションを重視してきました。これは、かつて地域（隣人）が担っていた親の心理的な支援に関して、その意義を再確認したいという思いがあるためです。併せて、こどもの城では、物理的な距離と心理的な距離は比例すると考えているためです。

平日のこどもの城では、スタッフの傍にお母さんたちが集っている姿をよく見かけます。中には、赤ちゃんを抱いているお母さんもいます。実は、その赤ちゃんが“我が子”ではないことも多々あります。そして、多くの場合、集っているお母さんたちは、「きょう、こどもの城に行こう」などと話し合って集っているわけではないのです。あたかも、かつて地域にあった縁台のまわりに人が集っているような状態なのです。子どもたちがそうであるように、大人もまた、その日に出会った人とすぐに寄り集まり、仲良くなることができるのです。このような状態が、子育て中の不安解消につながるなど、心理的な支援の役割を果たしているかのようです。ですから、「大人の城」と称されるのでしょう。

☆　こどもの城の教育的機能～教師として

こどもの城には、学校種を問わず、小学校から大学まで「先生」や「教師」と呼ばれる方々が、自身の勉強のために集って来られます。これには大別して２つの形式があります。一つは、採用されて２年目や１０年目など、“行かなければならない”研修として、こどもの城を選択される場合です。そして、もう一つは、ボランティア養成事業などに、“自ら”学びに来られる場合です。

前者としては、これまで開館以来、１０名ほどの教師が研修に来られました。研修内容は、個人の抱える課題を基に各人と相談しますが、ほとんどは利用者とともに遊ぶ、または親と語ることに費やされます。

今年度に来られた３名の教師からは、次のような感想も聞かれました。

「全ての教師がここに来た方がいい。」

他にも、こんな感想が聞かれました。

「教師を目指したときの原点が、こどもの城にはあった。学校でも、本当は、こうやって多くの時間を子どもと過ごすなり、保護者の方と語り合うなりして過ごしたいのですが、なかなかできなくて。」

このような感想は、現代の教師の置かれた立場を考えるうえで、なかなか興味深い感想です。今後も、こどもの城では、多くの教師の研修を受け入れていきます。

もう一つ、後者としては、開館前から数名の教師が、こどもの城のボランティアとして活動しながら、研修などを活用して、自身の学級経営などの教育手法を学びに来られています。

教師を対象に実施されている研修のほとんどは、勤務として命令されて参加する形態です。その多くが、教師だけを対象としたものです。他は、個人として教師自身が学びの場を求めて参加されることになりますし、研修内容によっては遠くまで行く必要があるものもあり、命令以外では参加しない（できない）教師も多くおられることでしょう。

一方で、教師が抱える課題は時代の推移とともに複雑になり、経験だけでは乗り越えられない内容のものも増えてきているように思います。

このような中、こどもの城では、自ら、カウンセリング、ファシリテーション、企画、リスクマネジメントなどをテーマとして学びの機会を提供しています。現在、こどもの城のボランティアとして学びに来られている教師の多くは、３０代～４０代の現役の親世代です。「教師として、そして親として、両面での学びになっている」という感想をいただいています。また、教師だけを対象とせず、例えば、いっしょに参加している保護者と立場を超えて研修されるなどして、かえって教師にとっては多くの学びがあることもふれておきます。教師と保護者、どちらも大人に違いありません。このような現状もまた、こどもの城が「大人の城」と称される一因かもしれません。

今後も、こどもの城でよければ、いろんな教育手法を学べる場になるように、広がっていけばいいなと考えています。

☆　森のようちえん全国交流フォーラム～実行委員として

平成２７年１１月２１日～２３日の３日間、国立諫早青少年自然の家の教育機能を活かして、九州で初めて「森のようちえん全国交流フォーラム」が開催されました。このフォーラムは、開催地において実行委員会を結成して実施するものです。開館以来、「森のようちえん」の活動を展開してきたこどもの城も、この実行委員会において、企画段階から役割を担わせていただきました。何よりも、開館以来、子育てや教育に関する様々な方がこどもの城を訪れていただいたので、多くの人的な情報がこどもの城に集っていましたので、実行委員の呼びかけにおいても中心的な役割を果たすことができました。

それよりも、このフォーラムにおいて最も活躍していただいたのは、当日の運営スタッフとして集っていただいた方々です。主婦、婦人会、老人会、議員など立場を超えて多くの市民がフォーラムの運営を支えていただきました。まさに、多くの大人が学びの場をともに創っていただいたのです。このように、多くの大人がこどもの城に集る現状もまた、「大人の城」と称される一因だと考えます。